

資料涉猟余話 その22

下平政一（まさいち）は 22歳の時、第12回衆議院選（大正4年6月25日）に出馬する伊原五郎兵衛（9代目）の参謀として、学んでいた明治大学から飯田に戻った。伊原は落選したが、下平はそのまま伊原の経営する「南信」新聞に記者として飯

田に残り、鉄道敷設運動を展開する伊原を支えた。下平は、竜丘駄科出身の弁護士下平喜一の長男として明治26年東京芝佐久間町

1冊だけの肉筆・家宝本の筆者

嶋 不濁

と憲政擁護の運動の中に身を置いていた。

大正5年1月に入営、除隊後の大正6年4月正式に「南信」に入社。以来、下平生、波二、他の筆名で健筆を揮う一方で、鮮支旅行などを企画し、日清日露戦争

だが、その後は肉筆本「家宝本」執筆一本に絞り、硯に向かう生活に入った。戦後になって左右の陣営から政界への誘いも多かったが、30歳で病み73歳まで生きた母の元を離れることを厭って表舞台へは出ず、反権力の自由人を通した。

その豪華肉筆本、1家1冊の執筆代金は当時の値段で10万円。伊那谷の旧家の歴史を綴った一家の家宝本は今となってみれば地域の歴史であり、宝である。地域の歴史や文化を訪ね、旧家を取材していると、この人の名前をよく耳にした。さらに「南信」の著者目録をPCに打ち込んでいると頻出するこの名前が妙に気にかかったが、杳としてその素性は知れなかった。

数年して、『伊那』304号（昭和28年9月）に「肉筆本郷土篇百篇」の下平還暦の年の寄稿があり、100篇のリストがあることを知った。：今もお江戸町の棟割二軒長屋の当時の家に、政一の秘書役だった末娘和子さん（84歳）が住んでいる。昨秋、和子さんを訪ね、創刊間もない『銀花』8号（昭和44年3月）に特集「ある日本人」で「毛筆でつづる、気骨ある名人」下平政一」として6頁が組まれているのを知った。『伊那』執筆から16年後、下平、喜寿の時の取材である。記事には肉筆本が「二百冊を数えた」とあった。下平は、それから8年後、昭和52年に85歳でひっそりと逝った。

その折、政一の長男が彫刻家北一明（下平昭一）であり、彼もまた一昨年10月19日に亡くなっていたことを和子さんから知らされた。



下平政一（『銀花』より）と、肉筆本

で生まれた。4歳の時、父が死んで、母の生家のあった飯田江戸町に戻り、脳を病む母と暮らした。13歳の頃から「南信」伊原五郎兵衛に原稿を買ってもらい、学資に当て、旧制飯田中学を卒業、明治大学予科に進学。母方の曾祖父小野湖山に漢学を学び、陽明学から政治を志し、大学に進むと、自由民権運動の波の中、尾崎行雄・犬養毅・大江卓ら

後の大陸視察団を組織した。またその後、主筆となり、東京に長期駐在、政治人脈を活かし国際的な視野で政治・経済・教育を語って飯田下伊那の青年を唱導した。「信濃時事新聞」主筆だった池田愛泥との紙上論戦も峽谷を熱した。

大正12年3月末、30歳の時、知行合一を貫くため新聞社を退社。今村忠助などの惜しむ声も多く寄せられ